

水、砂、土と触れ合う中で見えてくる
子どもの思い、私たちの思い
～エピソード記述と保育カンファレンスを手がかりにして～

門司保育所（みどり園）

執筆者：中島陽子・福田久美子

キーワード：自然、想像力、コミュニケーション、心の育ち

I. はじめに

昨年度の研究では、エピソード記述を取り入れ職員全体で取り組んだ。しかし、馴染みのない職員からは戸惑いの声があがり、今回は研究を進める前に勉強会を行うことにした。職員全員が揃うことが難しいため、二つのグループに分かれて事例を読み合い、記述方法を理解し、一人一事例を目標にエピソード記述の共通意識を深めていくことになった。

また、日常的に自然の中でダイナミックにあそぶ経験が少なくなっている現在、保育園での戸外あそびは、子どもの育ちにとって欠かせないものとなっている。特に戸外での水、砂、土との触れ合いは子どもの心身を開放的にし、伸びやかな育ちを促すエッセンスになると考え、今回の事例研究では、水、砂、土との触れ合いに着目し、このことを通しての活動の発展・子どもの心情の変化を追う中で浮き上がってくる問題点を職員間で共有し、保育の振り返りを行い、それをまた実践に返し、共に育ちあうことを目標にしていきたい。

II. 研究の目的

- ・水・砂・土と触れる時の気持ちよさを通して、エピソードから見えてくる子どもの姿に着目する
- ・子どもとじっくりコミュニケーションを

とりながら「させる保育」ではなく、子どもの気づき・発見に共感し、共に育ちあう保育を目指す

III. 研究の方法

・水、砂、土と触れ合うことで生まれる、子どもの表情・心情・育ちをエピソード記述の方法で記録する

・「保育実践」→「エピソード記述」→「保育カンファレンス」→「リライト」→「保育実践」という一連のプロセスを経て、保育の振り返りを行う

IV. 事例と考察

【事例 1】

2歳児男児A「いってきま～す」

平成23年12月17日生まれ

父・母・姉・兄・二世帯住宅で祖父母も同居している7人家族。姉兄は小学生。

2歳児クラス18名 保育士3名

<背景>

登園時間が早く降園時間は遅いので保育時間が長く月曜から土曜まで毎日登園。就寝時間が遅いようで、朝登園すると機嫌の悪い日が多く、ゴロゴロ横になっていることも多い。11時前後になると眠くなって活動の途中でウトウトし始め、昼食途中で寝てしまう毎日である。

生活・活動両面で友達と一緒に活動から

外れてしまうことが多く、その都度個別に対応するが、なかなか活動に入ろうとせず苦慮する状態である。無理に活動に誘わず、好きなように行動させ、保育士が傍で見守り一緒に行動しているとたいへん機嫌よくしている。友達との活動が楽しくなるようにと色々と工夫しているが、気に入らないと目を瞑ってひっくり返って動こうとしない様子が見られる。

<エピソード>

戸外あそびの時のA君は、アスレチック遊具・三輪車・砂場等忙しく移動して友達と関わりをもってあそぶ様子はほとんど見られず、自分の気の向くままに移動しているといった様子である。

5月の外あそびをしている時のこと、A君は最初いつものように一所には留まらず、あちこち移動しながら過ごしていた。私はB君、Cちゃん、Dちゃんと砂山を作ったり、型抜きをしたりして「カレーできたよ」「ご飯よ～」などままごとを楽しんでいた。その時三輪車に乗ったA君が通りがかり、私とB君、Cちゃん、Dちゃんとのやり取りを見ている様子だったので「A君どこいくの？」と話しかけた。特に目的の場所は無かった様で少し間をおいて「あっち行ってくる」と答えが返ってきた。「あっち行くの？行ってらっしゃい」と声をかけるとA君はそのまま立ち去った。しばらくするとA君が三輪車に乗って戻ってきた。戻ってくるということが今まで無かったので、少し驚いたが「A君おかえり」と声をかけた。するとA君は「これどうぞ」と持っていたバケツを渡してくれた。「ありがとう。これカレーかな」と声をかけると「カレーよ」という答えが返ってきた。「A君がカレー持

ってきてくれたよ」と一緒にあそんでいた友達に声をかけると「わぁ～おいしそう」「少し下さいな」など友達が集まってきた。A君は集まってきた友達に機嫌よく砂のカレーを分けてあげていた。

友達と接するときは、おもちゃの取り合いや場所の取り合いが多かったので、このように穏やかに友達と楽しんでいるA君の様子を嬉しく感じながら見守った。砂のカレーを分けてしまうとA君は私の側に来て「先生、行ってきま～す」と笑顔で言って三輪車に乗り込んだ。「行ってらっしゃい。今度はどこに行くの？」と声をかけると「カレー持ってくる」と笑顔で返事が返ってきた。「カレー」という言葉に、またカレーを持ってここに帰ってきて、友達に分けてあげる様子が予想できた。「A君またカレー持ってきてくれるってよ」「楽しみね」と一緒にあそんでいた友達に話しかけると、「A君大盛りね」「行ってらっしゃい」と出かけていくA君の後ろ姿に次々と声をかけられた。友達の声を背に受けながら弾んだ様子で三輪車を走らせていくA君の嬉しそうな様子を友達と笑顔で見送った。



<考察>

あの時A君は、私とB君、Cちゃん、Dちゃんとのやり取りを見ている様子だった。友達の楽しそうな姿に自分を重ねて一緒にあそんでいる光景を思い浮かべていたのかもしれない。「いってらっしゃい」「いってきます」はよく子ども同士・子どもと保育士の間で使われている言葉であるが、A君は今までそのやり取りが誰ともできていなかった。友達や保育士が「いってらっしゃい」「いってきます」とやり取りしているのを聞いて、本当は自分も言ってみたくて羨ましく思っていたのではないかと感じた。2歳児は言葉を使って意思の疎通を大きく欲する時期である。そのことを考慮すると、その子が、「自分もあの言葉を使って友達や先生とやり取りを楽しみたい」と感じている言葉をキャッチしておくことの大切さを感じた。私は自分の思いだけで「友達の輪の中に入れよう。友達と一緒に行動ができるようにしよう」と躍起になっていたが、大切なのはそのことではなかった。A君の気持ちに寄り添い、欲している言葉を発することでしか心は動かない。今までにない関わりが生まれ心が触れ合った手応えを感じる事が出来た。この経験を大切に考えることで、A君との関わり方が変わり、そのことでA君の様子も少しずつであるが変わってきたように感じる。A君と一緒に過ごすときには言葉や仕草、表情から心情を感じるとともに、視線の先にあるものは何か、今欲していることは何かを敏感にキャッチすることで心に共感できる工夫をするようにした。少しの時間ではあるがブロックで剣や列車を作って友達とイメージを共有してあそぶ姿が見られるようになったこ

とは大きな変化である。

【事例 2】

1歳児女児E「Eちゃんのまいまい」

平成24年7月20日生まれ

家族構成は父、母、本児の3人家族である。

1歳児クラス18名 保育士4名

<背景>

0歳児からの進級児で人見知りもなく、クラスの中でも体格がよく友達を呼ぶのに肩をトントンしただけで、小柄な友達が転がってしまうくらい力強い本児で、給食は好き嫌いなく、なんでも食べている。

歌や手あそびが大好きで、近くで保育士が歌っていると寄ってきて一緒にしたり、「まだまだして」とリクエストをせがむ場面もある。言葉（単語）がまだ、はっきりと出ないので、単語の最後だけを発している。母親が「めっ」と怒っていたのを「あい」と言うようになり、次に「まい」と発し、Eちゃんの思ったのとちがうことをすると「まい、まい」と手を振って怒っている。言い出したら聞かないEちゃんに手こずる母親をよく見ることがあった。

<エピソード>

進級して2ヶ月、前年度からの継続の担任にはEちゃんからかかわりを持つと近づいて行くが、今年度から担任になった私にはなかなか親しく接してくれずにいた。そんなある日の戸外あそびをしていた時のこと、帽子をかぶり外へ出ていくEちゃん。固定遊具よりも砂遊びが大好きであるEちゃんは、いつものように砂場へ直行した。

砂場に置いてあるバケツやスコップなど砂を入れてあそぶ容器の中から、自分の好

きな物を見つけ片手にスコップを持った。その容器に砂を入れたり、山のように砂を盛ったり砂あそびを楽しんでいた。その時、親しくなるきっかけにと私が型入れの容器に砂を入れ、「プリンどーぞ」と言って見せると、Eちゃんは手でその砂のプリンをぐしゃぐしゃにして、他の子も一緒とはいえEちゃんの笑顔を見ることが出来た。するとEちゃんが、頭の上に人差し指を左右に立てて何かを言ってきた。私は何を伝えようとしているのかわからず「何、ウシ？」と聞くと「まい、まい」と手を振って違うと言っているようだった。また、同じように頭の上に指を立てて伝えようとしていた。鬼は怖がるから鬼のつのではなさそう。アンパンマンの大好きなEちゃん、型入れの容器の中にバイキンマンがあったのを思い出し「バイキンマンの？」と言うと首を縦に振り、バイキンマンの型入れとわかった。あわてて探しに行くと、Eちゃんもついてきて、一緒に探し始めた。「あった」と私が取り上げるとバイキンマンではなくドキンちゃんだった。Eちゃんに渡し、「まい、まい」と怒って投げ捨てるかと思っていたら、怒らずに2個あったのを一つ友達にあげていた。砂を入れてと来たので入れてみたが、きれいに輪郭ができたものの、細い角が1本のドキンちゃんではEちゃんは喜びもなく見つめていた。やはりもう一度探そうとおもちゃの入っているカゴを見に行くと、Eちゃんもついて来て、かごの向こう側にバイキンマンの型入れが転がっているのが見えた。「バイキンマン、あったよ！」と見せると、とてもうれしそうに手に取って、さっそく砂を入れてと私に持って来た。ドキンちゃんと同じ、角は細くて顔ははつきり

していなくても、2本の角があるからか、とてもうれしそうなEちゃん。作っては壊すといったあそびを何度か楽しんでいた。その時、他の保育士の「さあ、片づけましょう」という声が聞こえてきた。私が、「Eちゃんお片づけよ」と言うと、「まい、まい」と手を振って拒否した。「また、今度あそぼうね」と言っても「まい、まい」と言うばかりだった。やっと見つかったバイキンマンの容器であそぼうと意気込んでいたEちゃんにお片づけをすすめるのが酷になり、Eちゃんはしばらくそのままあそばせておいて、私は勝手に作った歌を歌いピョンと跳ねながら片づけを始めた。そんな私の様子を見ていたのか、しばらくするとEちゃんは片づけを始めた。側にいた子どもたちにも「ないない、まい、まい」と何度も言っていた。Eちゃんは落ちているおもちゃを拾い、最後にバイキンマンの型入れを片付けて、その後も機嫌よく足を洗って部屋に入って行った。



<考察>

4月に進級し担任保育士も変わり、クラス全体としてはやっと落ち着いてきたが、Eちゃんとはまだ打ち解けていない部分も感じられ、出来るだけ多く接する機会を持ち信頼関係を築いていきたいと思っていた。

しかし、単語もはっきりしないし語尾しか言ないEちゃんの思いを汲み取って気持ちを共有することができずにいたことで「まい、まい」と怒らせてしまうことも多かった。関わりをもとうと何か一緒のあそびをしようとタイミングを計るもののEちゃんも前年度からの担任に行ってしまうことが多く、なかなかじっくりと一緒にあそびに入ることができないでいた。この日の一生懸命身振り手振りで伝えようとするEちゃん、そしてEちゃんから「バイキンマン」のリクエストに応えることで、関わりが深まることを期待した私にも、楽しみ始めたばかりでお片付けとなったのはとても残念で、バイキンマンの型入れを名残惜しくて手放せない様子なのがよくわかった。Eちゃんもそんな風を感じたのか、それとも他の子にバイキンマンをかたづけられたくなかったからか、どちらにしても自分から最後の最後にバイキンマンを片付けて自分から足を洗いに行ってくれたことは、今まで毎回のように「まいまい」と言いながら仕方なく足を洗いに行っていたEちゃんにはめずらしいことだった。私もなんとか思いに応えようとし、Eちゃんもまた私に応えてくれたかのように片付けだし足を洗いに行き、そのようなかかわりを持たれたことにびっくりもしたが嬉しく思った。言葉が言えるからすべて伝わるのではなく、自分の気持ちをわかろうとしてもらえるか、そしてわかってもらえるか、私たち保育士の受け止め方の大切さを感じた。言葉をひきだすよう保育していくのももちろんの事だが、思いを「聞こうとすること」「受けとめること」も大切にしていけることが必要であると思った。はじめは困惑していたが、今回の

ことで初めて言われることがうれしく思えてきた。言われなくても思いをくみ取ることもちろん大切なことだが「まいまい」と言ってくれることも関わりの一つで大切な事だと思うようになった。

V. まとめ

昨年度に引き続いてエピソード記述に取り組み、保育カンファレンスでは、他の保育士のエピソードをグループに分かれて読み合い、どう感じたのか意見を出し合った。その中で、それぞれの捉え方を否定するのではなく、別な見方をすることに発見があり、改めて気づくことなどもあった。他のクラス担任や給食職員などもその子の表情や心情などの情景を思い浮かべることができ、職員同士が共感することができた。今回の研究で、子どもの心情や変化に寄り添い、子どもとの接面を見逃さずにかかわることの大切さを職員全員が感じた。しかし、事例研究では、砂との触れ合いに着目した事例が多く、水や土との触れ合いが薄くなってしまうことが反省に挙げられる。



自然の水、砂、土に触れ合うあそびの中で子どもたちは、私たちに思いをぶつけてきてくれたように感じられる。決まりごとのある遊具や玩具だから、室内だから育たないのではなく、自然の中という解放感

から表情や心情が大きく表れたように思い、それゆえに「させる保育」ではなく、子どもたち自身があそびを無限に広げていくことで、伸びやかな育ちを促すのではないだろうか。そして、それを私たち保育士自身も子どもたちと共感し、共に育ち合う保育を続けていきたいと思う。また、このように子どもの心情や変化に寄り添い子どもとの接面を見逃さずにかかわることが保育士の本来の専門性であると考えている。

【参考文献】

- ・ 鯨岡 峻／鯨岡 和子著
『保育のためのエピソード記述入門』
ミネルヴァ書房（2009）
- ・ 鯨岡峻先生の研修資料より
「保育の変革期の中で、
あらためて保育の基本を考える」
「エピソードを通して
子どもの心の育ちを描く」